

新着案内

町田の文学

2017年4月1日発行 第36号

町田ゆかりの作家や市民の皆さまがお書きになった文学作品などのうち、
2016年10月から2017年2月末までに、購入や寄贈等により町田市民文学館で
受け入れした主なものをご紹介します。

これらの作品は、町田市立図書館の利用券を使って借りることができます。

なお、貸出中の場合は、リクエストサービスをご利用ください。

また、市民の皆さまがお書きになった文学作品のご寄贈もお待ちしております。

詳しくは、カウンターの職員にお尋ねください。

はぎうだこう 特集:山の文芸誌「ベルク」と萩生田 浩さん

毎号、文学館に寄贈していただいている雑誌「ベルク」。年2回の発行で、昨年10月の最新号は122号。創刊は1972年9月、すでに半世紀近くも続く山の同人誌です。同人15名のうち約半数が町田や横浜、相模原など近隣の山歩きを愛する方々。8年ほど前から編集を担当されている小野路町在住の萩生田 浩さんにお話を伺いました。



2016年10月刊行の「ベルク」第122号と、2005年に別冊としてまとめられた創刊号から第100号までの総目次・作者別索引

『ベルク』は山と文学を結合させた山の文芸誌である。一般のいわゆる文芸同人誌とは異なるが、山岳会の会報ともちがい、山仲間が同人誌を発行する目的で集まって出している。

体力にまかせてただ山に登るという行為から脱皮し、山岳文学という道を開こうとするものである。紀行、随筆、詩、創作を中心に、広い視野に立って自然を表現してゆく場である。」(創刊当初から掲げる『ベルク』についてより)

◇インタビュー◇

Q：「ベルク」は「山と文学を結合させた山の文芸誌」とありますが、萩生田さんが参加されたきっかけをお聞かせください。

⇒私が「ベルク」に参加したのは、19歳、「ベルク」第12号のときです。18歳のときに山岳雑誌「山と溪谷」に投稿した詩が掲載され、それを見た「ベルク」の同人から手紙をもらい「ベルク」を知りました。「山と溪谷」には、当時読者の文芸投稿ページがあったのです。その頃、山と絵と文章を合わせた「画文」などで構成した山の本を作りたいと夢見ていたので、似たような本があることを知り参加したのです。

Q：1972年創刊の「ベルク」、もう半世紀近く続いています。息の長い活動を支えているものは何ですか。

⇒やはり、同人各人の「山が好き」「書くことが好き」という熱意や志ではないでしょうか。入退会があっても、同人の人数が十数名で推移し、多からず少なからずという頃合もいいのかもかもしれません。よく言えば家族的な雰囲気が維持され、誰かひとりが欠けても皆が困るという意識が、本誌を継続させているのかもかもしれません。

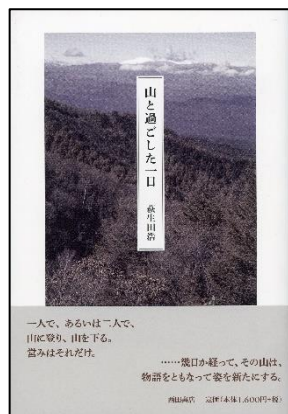
Q：長年続けられると大変なこともおありかと思います。刊行に際して、一番ご苦労されるところはどんなところですか。

⇒好きなことをやっているのですから、取り立てて「苦労」というものは感じません。かつては原稿締切日に遅れたりする人もいましたが、最近はなくなりました。それでも、同人にとっては、書く「山のネタ」がない、締切りに追われる、ことが苦労でしょうか。個人的には、執筆や編集作業などでけっこう時間をさかれることが近年の悩みです。

Q：「ベルク」は文学館のほかには、どこで手に取ることができますか。

⇒一部の登山用品店で販売しているほか、同人が山へ出かける際に数冊をザックに入れて行き、泊まったり休憩したりした山小屋に置いてもらうことがありますので、意外な山小屋で目にしたりすることがあります。また、山岳書コーナーのある山岳博物館や山岳美術館、図書館などには毎号寄贈していますので、見ることができます。

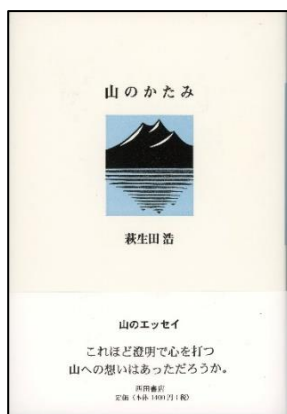
萩生田さんは、ご自身が「ベルク」に書かれた随筆を集めて、これまでに2冊の単行本を出版されています。「歩き始めよりも新緑は淡くなり、林には茂った下生えもなく、すがすがしい。ツツドリの声が谷を渡る。生まれたばかりの風が吹き方の練習をするように吹き抜けていく。」などという文章に出会うと、改めて本を読む喜びや愉しみを実感させられます。どちらも第一級の山岳エッセイ集。



★『山と過ごした一日』

(2016.12 西田書店)

「冬隣り」「孤峰の春」
「春の背中」「道案内」「裏山の神様」「滝から滝へ」
「霧の十二ヶ岳」「鼻歌」「山の声」「葉桜」「遠く離れて」
「枯葉のころ」の12篇を収める。



★『山のかたみ』

(2005.9 西田書店)

巻頭の散文詩「山頂」のほか、「石を拾う」「峠みち」「こぎつね」「日蔭みち」「水晶」「峠の名前」
「稜線で会いましょう」など16篇を収める。

Q：萩生田さんご自身についてもお聞かせください。町田生まれ、町田育ちということですが。

⇒1957 年生まれです。書店員や地図編集会社などを経て 30 代後半で会社勤めを辞めて、フリーランスとして地図の制作や登山ガイドブックの取材執筆などをやっていました。現在は、亡き父のあとを継いで家の事業をしています。3 年ほど前から NP0 法人「小野路街づくりの会」の会員になって、町内の「小野路宿里山交流館」にも関わるようになりました。「山椒堂（さんしょうどう）」という工房名で地元作家の絵を借りて、絵葉書の制作・販売（「里山交流館」にて販売）などもしています。



第 111 号表紙絵

Q：山に行かれるようになったきっかけは何ですか。

⇒鶴川中学 2 年の夏休みに林間学校で行った信州・霧ヶ峰でその景観に魅了されました。同じような草原の山へ行きたいと思い、中学 3 年のときに級友と箱根の鷹巣山、丹沢の大野山などへ行くうちに、山歩きの楽しさを覚え、以来、続けています。

Q：ご著書のエッセイを読ませていただくと、萩生田さんの山歩きには何か柔らかな哲学のようなものがあります。 「“山歩き”のダンディズム」（『山のかたみ』p141）などという言葉も出てきますが。

⇒「山歩きのダンディズム」は作品執筆の流れの中で登場した言葉にすぎず、特に「山歩きの哲学」があるわけではありません。ですが、山に浸るには大人数よりもひとりでの山行が相応しいと思いますし、昼食休憩に時間をかけるよりも、山の景観を眺めている時間に多くを費やしたいと常に思っています。

Q：2 冊のご著書には、瑞々しい素敵な文章がたくさん収められていますが、いつどんなところで執筆されているのですか。「ベルク」の表紙も毎号ご自身の切り絵作品ですね。

⇒若い頃、サラリーマン時代には、出勤前や昼休みに喫茶店で、あるいは帰宅途中にファミレスに寄り、夕食をとりながら原稿用紙の升目が入った手帳に書いていましたが、現在は自宅の机で 1 日の用事を終えた夕刻の 2～3 時間にワープロ打ちをしています。実際の山行をベースにした紀行文ですが、おもしろみや変化を出すためにところどころで創作を加えることもありますし、読み直したり作品世界に没入する時間も必要なので、平均すると 1 日に 1 ページ進めるのがやっとです。それも毎日できるわけではありません。

表紙を私の絵にするようになったのは、2001 年 4 月の第 86 号からです。絵は独学です。色紙を切り貼りして図柄を決定し、印刷の段階で色指定して作品に仕上げます。そのへの技術は、会社勤めの中で身に付けました。



第 119 号表紙絵

Q：山の本のほかにはどんな本を読まれるのですか。差支えなければお聞かせください。

⇒好きな小説家は福永武彦や丸山健二で、よく読みましたが、山の随筆では串田孫一で、影響を受けています。現在は不本意ながら読書の時間をあまり持てずにいます。

Q：最後に「ベルク」やご自身の今後について、夢や抱負がありましたらぜひ。

⇒最近若い人の参加もなく、「ベルク」の同人は高齢化の一途です。かつて 20 代 30 代だった人も 60 代 70 代になり、現状をかんがみれば「終刊」に思いを馳せる今日この頃です。最後まで「山の文芸誌」を貫き「きりのいい時期」に終わらせることを模索している、ということでしょうか。個人的には、山の紀行文や小説めいた創作をまとめて第 3 弾の単行本刊行や、「ベルク」の表紙絵をまとめて山の画文集を発行したいと考えています。

ありがとうございました。



文 学



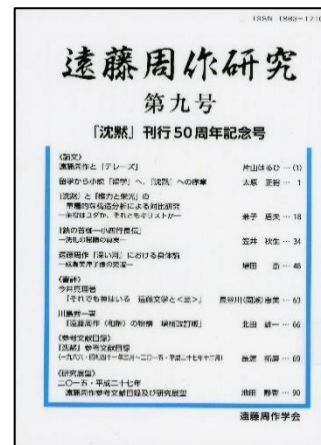
★『鼠、嘘つきは役人の始まり』

「巷で話題、奉行所の名与力、＜鬼の万次郎＞。しかしその正体は、盗人よりもなお悪い・・・!!」（帯より）鼠シリーズ第10巻目。



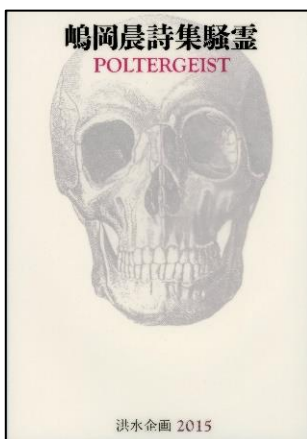
★『市川清一投句集翡翠』

定年を前に、退職後にできるものをと始めた俳句。新聞の俳壇に投句し、掲載された入選句を、四季ごとに美しい写真とともに収録。「翡翠（かわせみ）」は夏の季語。



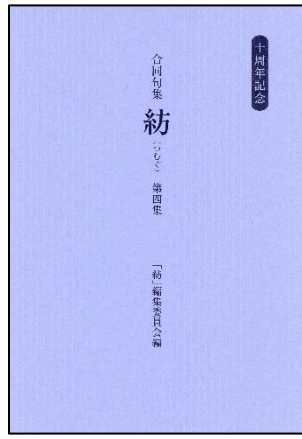
★『遠藤周作研究』

遠藤周作学会の「紀要」第9号。今号は、『沈黙』刊行50周年記念号。「遠藤周作と『テレーズ』」ほか4本の論考、書評等を収録。



★『嶋岡晨詩集騒霊』

市内在住の詩人による最新詩集。表題作ほか35篇を収める。「騒霊」＝ポルターガイストは、物が勝手に動いたり音を立てたりする心霊現象。「読者がこの詩的騒霊とともに一騒ぎ楽しんでくれることを望む。」（後記より）



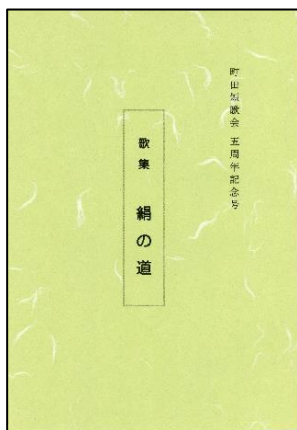
★『合同句集 紡（つむぐ）第4集』

毎月、当文学館で例会を開催している俳句グループ「紡ぐ会」の4冊目の合同句集。13名の会員による第3集以降の各50句を収める。



★『しらべ VII』

連歌、連句、川柳、俳句、短歌とオールラウンドに活躍する著者のライフワーク冊子。今号は、寛永8年刊の連歌書『連集良材』の翻刻を収録。著者は、本年第14回吉井勇短歌大会で、大賞を受賞。



★『あたしたちの未来はきっと』

町田市出身のライター＆コラムニストによる初の小説集。町田発の文芸創作誌「ウィッチンケア」掲載の、町田が舞台の短編 10 作品を収録。

★『歌集 絹の道』

毎月、当文学館で例会を開催している町田短歌会の創立 5 周年を記念する初の合同歌集。12 名の会員による各 15 首を収める。

★『涼やかに静かに殺せ』

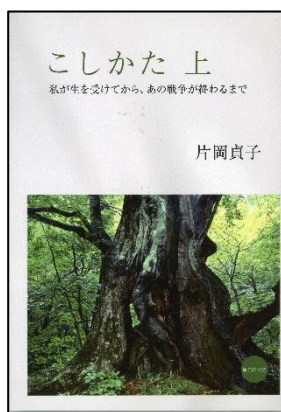
「各界の紳士たちが集まるバーに次々と舞い込む難事件。功成り名を遂げた彼らがカネと人脈を駆使するも、やがて、超大国の思惑も絡む巨大な陰謀が・・・」(帯より)

書影	タイトル	編著者	出版者	出版年	分類
	友の墓の上で	赤川 次郎／著	集英社	2016.8	小説
★	鼠、嘘つきは役人の始まり	赤川 次郎／著	KADOKAWA	2016.12	小説
	綱わたりの花嫁 (Joy novels)	赤川 次郎／著	実業之日本社	2016.12	小説
	栗色のスカーフ (光文社文庫)	赤川 次郎／著	光文社	2016.9	小説
★	投句集 翡翠	市川 清一／著	NHK学園	2016.1	句集
	エフーディ vol. 2	エフーディの会		2016.5	詩歌
★	遠藤周作研究 第九号	『遠藤周作研究』編集委員会／編	遠藤周作学会事務局	2016.9	作家研究
	豆大福と珈琲	片岡 義男／著	朝日新聞出版	2016.9	小説
	万年筆インク紙	片岡 義男／著	晶文社	2016.11	随筆
★	詩集 騒霊	嶋岡 晨／著	洪水企画	2015.12	詩集
	白洲正子のおしゃれ	白洲 正子／著	新潮社	2016.12	随筆
	心の遊えんち	高橋 しげを／著	創英社	2016.11	詩集
★	合同句集 紡 第四集	「紡」編集委員会／編	紡ぐ会	2016.12	句集
★	しらべ VII	永田 吉文／編		2016.1	詩歌
	壁の男	貫井 徳郎／著	文藝春秋	2016.1	小説
★	あたしたちの未来はきっと (ウィッチンケア文庫 01)	長谷川 町蔵／著	タバブックス	2017.1	小説
★	歌集 絹の道	町田短歌会／編		2016.8	歌集
	サーモン・キャッチャーthe Novel	道尾 秀介／著	光文社	2016.11	小説
★	涼やかに静かに殺せ	森村 誠一／著	双葉社	2016.5	小説

★印の作品は、欄外に書影と短評があります。



一般書



★『こしかた』上・下

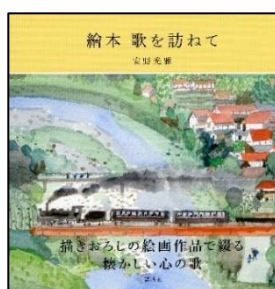
上巻「私が生を受けてから、あの戦争が終わるまで」、下巻「戦争は厭だ。戦後、貫き通した思い」のサブタイトル。

1931年生まれの著者が、戦前から戦後の激動期を、抑えた筆致で描く小説のような半生の記録。



★『本を読む』

シェイクスピア『ヴェニスの商人』から黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』まで多彩なジャンルの26冊を取り上げた読書エッセイ集。



★『繪本 歌を訪ねて』

「蛍の光」「夏の思い出」「シューベルトの子守歌」「旅愁」「どじょっこふなっこ」など、懐かしい歌38曲について、描き下ろしの絵画作品とともに綴る美しいエッセイ集。

書影	タイトル	編著者	出版者	出版年	分類
★	繪本 歌を訪ねて	安野 光雅／著	講談社	2016.1	随筆
★	本を読む	安野 光雅／著	山川出版社	2016.12	読書
	熊本城を救った男谷干城（河出文庫）	嶋岡 晨／著	河出書房新社	2016.1	伝記
★	山と過ごした一日	萩生 田浩／著	西田書店	2016.12	随筆
★	こしかた 上・下	片岡 貞子／著	私家版	2016.6	自伝

【主な定期寄贈雑誌】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク（山の文芸）」

詩 誌：「騷（そう）」「璞（あらたま）」「構図」

短歌誌：「青垣」「歌と観照」「かがりび」「開耶（さくや）」

「日本歌人クラブ 風」「玉ゆら」「はなさい」

俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺（あふりね）」「飴（こだま）」「山暦（さんれき）」

「蒼茫（そうぼう）」「都市」「波」「梅林」「風土」「八千草」



子どもの本



★『こけしがこけて』

「こけしがこけて だるま
が だまると あかべこ あ
っかんべー・・・」

新井洋行さんの新作幼児絵
本は、子どもたちに大人気。



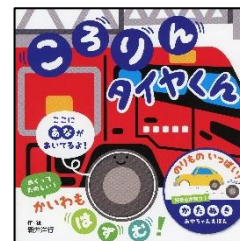
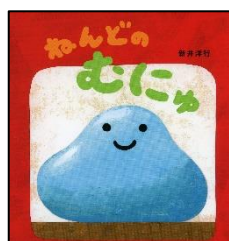
★『創作童話集(6) 魔法のえんぴつ』

2009 年の公民館での
童話創作実践講座（講
師・国松俊英氏）から生
まれたサークル「魔法
のえんぴつ」による 6 冊
目の作品集。



★『鳥のいる地球は素晴らしい』

鳥や生き物を通じて、
長年自然と向き合っ
てきた著者が、自らの歩
みに重ねて各地での出
会いを綴るノンフィク
ション。



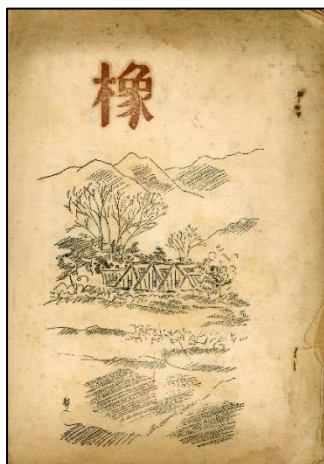
書影	タイトル	編 著 者	出 版 者	出版年	分類
	きもだめし （講談社の創作絵本）	新井 洋行／著	講談社	2016.6	絵本
★	むにゅとにゃみー	新井 洋行／著	偕成社	2016.11	絵本
★	ねんどのむにゅ	新井 洋行／著	偕成社	2016.11	絵本
★	むにゅくらべ	新井 洋行／著	偕成社	2016.11	絵本
★	カラフル	新井 洋行／著	岩崎書店	2016.9	絵本
★	ころりんタイヤくん	新井 洋行／著	フレーベル館	2016.9	絵本
★	こけしがこけて （たんぽぽえほんシリーズ）	新井 洋行／著	鈴木出版	2016.12	絵本
	孔明vs. 妖怪孔明 （妖怪道中三国志 3）	三田村 信行／著	あかね書房	2016.11	物語
★	鳥のいる地球は素晴らしい	国松 俊英／著	文溪堂	2016.11	ノンフィクション
★	創作童話集 魔法のえんぴつ 6	童話創作の会『魔法のえんぴつ』／編著		2016.11	童話

トピックス

<資料収蔵庫から～新資料紹介>

戦時下八王子の文芸同人誌「椽」

「荒地」派詩人・三好豊一郎の若き日の詩が！



★「椽」第二輯

B5判／袋とじ18頁／
わら半紙・タイプ印刷／ホッチキス綴／
奥付なし／三好の詩
「西方の人」、小川富
五郎の詩「ある出来
事から」ほかを収め
る。



★「椽」第三輯

B5判／袋とじ17頁／
わら半紙・手書き孔
版印刷／細紐綴／奥
付なし／三好の詩
「鳩笛」、小川富五郎
の詩「くだもの」ほか
を収める。

町田高校をはじめ市内の小中学校校歌を数多く作詞した白秋門下の歌人、若林牧春氏の遺品（当館所蔵）の中に、「椽（とちのき）」と題するガリ版刷りの同人誌があります。第二輯と第三輯ですが、資料として興味深いのは、八王子出身で、のちに第二次「荒地」の同人として、鮎川信夫や田村隆一などとともに活躍した詩人、三好豊一郎の若き日の詩「西方の人」（10行）と「鳩笛」（15行）がそれぞれ掲載されていることです。

発行年月日こそありませんが、第二輯の「後記」に『『椽』第二輯を出し得た。空襲の為め焦土と化したこの土地から。然も時局が急轉回を示した直後に於てかくもなし得た事は甚だ感慨深い。』とあることから、刊行されたのはおそらく1945年8月2日の八王子空襲の直後ではないかと思われます。1920年8月生まれの三好豊一郎、25歳のときということになります。

八王子における戦時下の若者たちの文芸活動については、宮崎真素美氏（愛知県立大学）による論考「八王子の『蝶』―戦時下の若き詩人たち―」（『国語と国文学』2008年1月号）があります。偶然古書店の目録に出現した、1942年6月発行と推定されるガリ版刷りの詩誌「蝶」は、八王子在住の小川富五郎という魅力的な詩人を中心に、三好をはじめ彼の周囲に集う戦時下の若き詩人たちの動向を伝える貴重な資料で、鮎川信夫なども当時すでに注目していたもののようです。これらの資料は、もともと部数が少ないうえ、八王子空襲で同人の家の多くが焼失したため、現在目にすることはほとんど不可能とされているとのことです。

今回の雑誌「椽」は、小川富五郎など執筆者の数名が「蝶」と重なっていること、発行元の住所も同じであることなどを考え合わせると、「蝶」ののちに連なる未知の資料のひとつではないかと思われます。第二輯巻頭には若林牧春の短歌9首が掲げられており、牧春との交流も伺える興味深い資料です。

「町田の文学」第36号/2017年4月1日/編集・発行：町田市民文学館ことばらんど
〒194-0013 町田市原町田 4-16-17/TEL042(739)3420・FAX042(739)3421

* この冊子は300部作成し、1部あたりの単価は309円です（職員の人件費を含みます）。